

著 健 島

410  
405

780

るす配支を國英<sup>本</sup>  
力ヤダユ







193

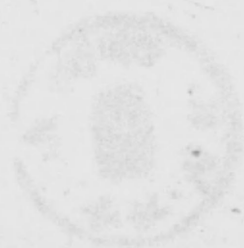


鹿島健著

英國を支配するユダヤ力

政經書房





## は し が き

第二次歐洲大戰は日と共に愈々激化されたが、英米の緊密なる提携、アメリカの露骨な對日攻勢、或はまたソヴィエト聯邦の對ドイツ開戦等々變轉極まりなく、情勢は一段と複雑になつて來たのである。

而してこの裏面には正にユダヤ人の策動も考へ得られる所であつて、ユダヤ人の世界顛覆の大陰謀とか、シオン議定書の暴戾な規定、乃至はユダヤ地底政府の一翼を形成すると云はるゝフリーメーソン結社の暗躍等々が豫ねてから論議されてゐたのであるが、事實ユダヤ人の動きには首肯し難きものがあるのであつて、よくこれを見極める必要があるであらう。

まことに七つの海を支配し、太陽の沒することなしとまで云はれたイギリスこそ

實はユダヤ人制壓下の國でもあり、イギリスの興廢は即ちユダヤ人の興廢とも觀ることが出来る。

茲に本書は小冊子ながら、イギリスに於けるユダヤ力の全貌を掲げ、以て今次大戦の真相把握の一助たらしめんとした。これ、敢えて本書を公刊した所以に他ならない。

昭和十六年七月

著 者 識

## 目次

はしがき

- 一、今次歐洲大戰の性格
- 二、世界に君臨するロスチャイルド家
- 三、英國のユダヤ人口
- 四、政界に躍る人々
- 五、金融界の方面
- 六、産業諸部門に於けるユダヤ支配
- 七、支那のサスーン財閥
- 八、代表的人物の素描

むすび





# 英國を支配するユダヤ力

鹿

島

健

## 一、今次歐洲大戰の性格

一九三九年九月三日、イギリス及びフランスの對ドイツ宣戰布告が行はれ、當初は所謂「戰鬪無き戰爭」の状態に在つたものであるが、その後ベルギーの降伏、イタリーの參戰、フランスの敗退、更に又一九四一年六月二十一日に至ればドイツ、ソヴェエト兩國間の開戰、外交關係の斷絶となり、戰局の一大轉回が齎らされたのである。

誠に一九三九年八月十九日に締結された獨ソ通商條約や、同月二十三日に調印された兩國不可侵條約の手前から云つても、ソヴィエト聯邦の反ドイツ行動は青天の霹靂たるかの感が深いのであるけれども、しかし、ユダヤ人問題の上から觀れば別に不可思議なことでもないものであつて、當然の歸趨と云へよう。

即ちイギリス、アメリカ、ソヴィエトの諸國は何れもユダヤ人の要衝に躍る所の舞臺であつて、それ／＼國は異なれ、ユダヤ人相互の密接な連繫は容易に排し得べくもないのである。

イギリスの存亡愈々危しともなれば、ソヴィエトのユダヤ人は全力を擧げて對ドイツ開戦、大戰への突入にまで促したものと觀られるのである。

先づイギリスでは大法官ジョン・サイモンや前陸相レスリー・ホアペリーシャ、元内相ハーバート・サミュエル子爵等がユダヤ人であり、アメリカではルーズヴェ

ルト大統領の最高顧問たるバーナード・バルクや、財務長官ヘンリー・モーゲンソーがユダヤ人であるし、ソヴィエト聯邦では元外務人民委員リトヴィノフや、前石油人民委員カガノウィッチが、ユダヤ人であり、或は又スターリン首相の三度目の妻ロイザ（カガノウィッチの娘）や、外務人民委員モロトフの妻もユダヤ人であるとの評がある。

北村小松氏は「アプトン・シンクレアはユダヤ人だが、そのシンクレアと親戚關係になるならシムブソン夫人（ウインザー公夫人）もユダヤ人だといふことになるわけだ」と發表して居られるが、正確な資料は筆者は持ち合はせてゐない。けれども、茲にルーマニアを追はれたカロール二世に對するルベスク夫人のユダヤ人であることを想起する必要がある。

ユダヤ人にしてイエルサレム大學の教授たるアーサー・ルツピンはその著「ユダ

「ヤ人の運命と將來」の中で、ドイツのユダヤ政策に觸れ、「ユダヤ人がフランスの首相や、イギリスの陸相や、ロシアの外相や、合衆國の藏相であるのに、他方ドイツでは、土地の掃除夫の地位すら充たすことも出来なかつた」と述べてゐる。

ロンドンで刊行された「ユダヤ年鑑」の一九四〇年版によると、英帝國のユダヤ人は大略七十二萬八千人に及び、北米合衆國では四百五十萬人、ロシアでは三百五萬人となつてゐるが、これはユダヤ人側の發表であるから、ごく内輪の見積りなることを注意しなければならぬのであつて、ソヴェエト聯邦のユダヤ人は最近に於いては、その數殆んど北米合衆國と比肩し得る程の増加を示してゐる。

故にヒットラーの排ユダヤ政策こそは、これ等諸國のユダヤ人の反情を一層驅り立てたことは理解出来るのであつて、今次大戰勃發當初の一九三九年十月十九日には、支那のイギリス系ユダヤ財閥の巨頭サー・ヴィクター・サスンがイギリスの

戦時基金として百萬ドルを獻金して居り、その他バレスタインに於いても、ユダヤ人、チエーム・ワイズマン博士の指導の下に無慮四十萬人のユダヤ國民軍が編成され、イギリスへの忠誠を誓つたと傳へられてゐる。

去る六月二十四日の東京朝日新聞は、ドイツ、ソヴィエト兩國の關係に對する一般イギリス人の感情として、イギリスの文豪バーナード・ショウの次のごとき言葉を掲げてゐる。

「本當だとするには餘りに話がうますぎる。それは我々が望み得る何ものよりも以上のものだ。

我々と米國とがヒットラー粉碎といふ異常なる仕事に直面して喘いでゐるとき、ソ聯が傍觀しながら快心の笑を浮べてゐたのはほんの昨日のことだつた。

然るに今日はスターリンがヒットラー粉碎に喘ぐ時が來、我々は何もすることも

なく、ただ坐つて快心の笑を浮べてゐればよいことになつた」

斯くて今やイギリス、アメリカ、ソヴィエト三國間の同盟説さへ傳へられてゐるが、ドイツとイギリス並びにソヴィエトとの抗爭は、結局ドイツとユダヤ金權との抗爭と云ふことが出来るであらう。

## 二、世界に君臨するロスチャイルド家

世界的な大財閥、ロンドンのロスチャイルド家は、支那のサスーン家や、アメリカのクーン・ロエプ商會と竝んで三大ユダヤ財閥と云はれてゐるが、今や世界の政治、經濟に對する決定的な支配權を握る黄金王朝の總帥であるかに見える。

ヒットラーは既にマイン・カムプの「戦後に於けるドイツの同盟政策」の章で「ユダヤ新聞は一九一九年までは打倒ドイツに全力を注いだ。ドイツを叩くのはイ

ギリスの利益と云ふよりも寧ろユダヤ人の利益であつたのである。今や打倒日本のスローガンを掲げて猛烈な筆陣を張るのも、イギリスよりはユダヤ人の利害からである。イギリス人は世界制覇を目指し、そのイギリスをユダヤ人が狙らつてゐる」と述べてゐるが、然かもヒットラーによると、ユダヤ人の反ドイツ運動こそイギリスをして對ドイツ宣戰に赴かしめたものであると云ふ。

果して然らば、茲にユダヤ金權の總帥ロスチャイルド家の全力を擧げての活動も考へ得られる道理である。

「非常時國民全集、經濟篇」を繙くと、野田豐氏による次の如き記事がある。

「英國人がこれこそ我が國の代表的富豪といふ場合、彼等は決してその富力だけに就いて云はない。之がアメリカ人と違ふところだ。何よりも先づ、その連綿たる傳統を誇るべき家門が問題にされる。だから今でも彼等は自分の代表的富豪として

ロスチャイルド家、ベアリング家、及びシロイダー家の三つを推すのである。これ等三家はどの點から云つても中々に甲乙はつけ難いが、現ナマをふんだんに持つてゐるといふ點では何と云つてもロ家が一番らしい。しかし事業的活動から見れば、ペ家及びシ家の方に軍配が上がる」

ロスチャイルド家は、一七四三年にマイン河畔のフランクフルトの「ゲットー」(ユダヤ人窟)に一小商人として生れたメイヤー・アム・シエルに始まる。

彼はユダヤ人、ベンジャミン・デイスレリ(ビーコンスフイルド伯爵)と共に政界に名を馳せたライオネル・ロスチャイルド男爵の祖父に當り、古い貨幣の仲買や、兩替を以て身を立て、一八〇一年より時のヨーロッパ君主の中で最大の富豪と云はれたヘッセ・カッセルの領主フレデリック二世や、その子ウイリアム九世と親密な間柄となり、その財政上の援助をも行つたのであつた。



ロスチャイルドの名は、當時フランクフルトのユダヤ人商人にはそれぞれ自家の前に小さな看板を掲げる習慣があり、彼は赤い盾（ロット・シルド）を出して置いたから、自然に人呼んでロスチャイルドとなつたものであると云ふ。

彼の商法は通常のユダヤ人のそれとは異り、極めて堅實なものであつて、ルワンソーンの「戦争は儲かるか」によれば「ロスチャイルドの地位は普通の宮廷銀行家とは少しく相違して居り、大抵の宮廷銀行家はその君主のために資金を調達するのが役目なのだが、ロスチャイルドはその反對に、全ヨーロッパの君主中で最大の富豪と云はれたヘッセ・カッセル公ウイリアム九世の財政顧問となつて、彼のために借主を物色することであつたのだ」と云ふ。（永井直二氏ノ譯書ニヨル）

一八〇六年に領主がナポレオンの軍隊侵入の難を避けて國を離れた際には、三百萬ドルに及んだその正金や財寶の保管を委託されたのであつたが、その間にこれを

諸方面に貸しつけて莫大な利益を挙げ、その後無事に領主の歸國するに及んで元金に利子を添へて返済した。

そしてこれが却つて一層の信用を増すの因となり、金融界に牢固たる地盤を築き上げ、「國王等の銀行家」とも「銀行業者の帝王」とも云はるるの契機を成したのであつた。一八一二年に彼の死したる時には、その遺産は百萬ポンドに達してゐたと云はれる。

彼には五人の子供があつたが事業の擴張を行ふ爲、一七九八年には先づ最も優れた才能を持つてゐた三男ネザンをイギリスへ送り、以てロンドン家の基礎を作らしめた。

處がネザンの奮闘果して宜しきを得て、彼は先づマンチェスターに於いて織物業を開始し、次いでスペインに在つたウェリントンの軍隊に八百萬ポンドの資金を供

給し、やがてイギリス政府の重要な金融機關となつた。

ネザンに次いで一八一五年には次男サロモンがベルリン、後にウィーンに、一八一七年には五男ジエームズがバリへ、一八二一年には四男カールがナポリへとそれぞれ一家を創始し、而して長男アムシエルはフランクフルト總本家の當主として父の業を受け継ぎ、斯くて互に密接な連絡をとり、或は又ヨーロッパの諸貴族とも姻戚關係を得、以て今日の隆盛の基を開いたのであつた。

特にロスチャイルド家の戦争への投資は有名なもので、ナポレオンの敗退も一にロスチャイルド家の壓力に基くものの如くである。即ち概してロスチャイルド家の貸金はナポレオンの敵側に多かつたから、ナポレオンの勝利は當然ロスチャイルドの貸金の回收不能を招くことともなり、依つて茲にナポレオンとの反目に立ち至つたやうである。

アムシエル・ロスチャイルドの未亡人は「息子等が希望しない以上は、ヨーロッパに戦争の起る筈がない」と放語したことも傳へられてゐるのである。

ウォータールーの戦争は又ネザンの富を増す絶好の機會であつて、ヨットや傳書鳩を用ひて刻々移る戦況を速かに知り、愈々ナポレオンがウエリントンに敗れること確實と観るや、ロムバードの株式市場にこれと正反對の宣傳を流布して混亂に陥れ、その裏から殆んど無價値に等しき有價證券を買占めて巨利を獲たと云はれてゐる。

一八一四年から一八二三年に至る間に於いて、ロスチャイルド家によつてイギリスから大陸に持ち出された額は一千八百萬ポンドに及び、一八一七年より一八四八年に至る間に於けるヨーロッパのあらゆる政府のためにその公債を取扱つた金額は、實に六億五千萬ドルの多きに及んでゐるのである。

かの第一次歐洲大戰も、亦ロスチャイルド家をして一層有力ならしめることとなつたが、中歐の金融恐慌は同家に非常な打撃を與へたのであつて、今では稍々不振の状態に在り、ウィーン家の如きは殆んど昔日の俤はなく、パリ家も金融界から退き、フランクルトの總本家も銀行業務を停止したと云はれてゐるが、しかし、ロンドン家に至つてはハリファックス卿や、オリヴァー・スタンリーのやうな有力者とも姻戚關係があるが如く、外相イーデンとも親しく、その實力は侮り難きものがあると思はれる。

現在ではロンドンの當主はナタニエル・メイヤー・ヴィクター・ロスチャイルド男爵であり、彼はまた科學者でもあるが、同家はマーチャント・バンカー（個人銀行家）として活動しつつあり、その他にも、石油、海運、保險等の方面に投資してゐる。

### 三、英國のユダヤ人口

ユダヤ人口の計算は人々によつて區々様々であるが、一般にユダヤ教の信奉者をユダヤ人として算定してゐるやうである。而もその實數に至つては文獻によつて異なるのであるが、これはユダヤ人と非ユダヤ人との雜婚とか、改宗する者もあり、移動も頻りに行はるるが爲であり、勢ひ計算が困難となる。

ロンドンで發行されてゐる「ユダヤ年鑑」の一九四〇年版によれば、世界のユダヤ人口は一千六百五十一萬六千六百人となつてゐる。

今、同書によつてユダヤ人口を掲げてみることにするが、大戰勃發によつてイギリスからアメリカに渡るユダヤ人も相當多數に上り、かなり大きな異動があることに注意しなければなるまい。

先づこれを大陸別に観ると次の如くである。

ヨーロッパ

九、八九五、〇〇〇

アメリカ大陸

五、一二三、〇〇〇

アジア

八九七、〇〇〇

アフリカ

五六九、〇〇〇

オーストラリア

三二、六〇〇

計

一六、五一六、六〇〇

次に英帝國內には七十二萬八千四百六十七人のユダヤ人が居住してゐるが、その實數及び當該國總人口に對するパーセンテージは左の如くである。

(ヨーロッパ州)

英本國

三八五、〇〇〇

(〇・八)

アイレ

四、〇三七

(〇・一)

ジブラルタル

一、一二三

(五・三)

マルタ

五〇

(アジア州)

インド

二四、一四〇

アデン

六、五〇〇

(一三・五)

ビルマ

一、五〇〇

マレー

七〇三

香港

二五〇

サイプレス

七五

(アフリカ洲)



南アフリカ聯邦

一〇二、〇〇〇

(一・一)

南ローデシア

二、〇二一

(〇・二)

北ローデシア

四二六

ケニア

三〇五

(アメリカ洲)

カナダ

一六五、〇〇〇

(一・六)

ジャマイカ

一、八〇〇

(〇・一)

ニユーファウンドランド

二〇〇

(〇・一)

英領ギアナ

一三七

(オーストラリア)

オーストラリア聯邦

三〇、〇〇〇

(〇・四)

ニュー・ジーランド

三、二〇〇

(〇・二)

又主なる都市に於けるユダヤ人の分布状態を掲げてみよう。

(當該都市總人口に  
對する%)

大ロンドン

二三四、〇〇〇

(二・七)

マンチエスター

三三、〇〇〇

(三・五)

リーヅ

二五、〇〇〇

(五・一)

リヴァプール

七、五〇〇

(〇・九)

バーミンガム

六、〇〇〇

(〇・六)

ニューカスル

二、五〇〇

(一・七)

ブライトン

二、五〇〇

(一・七)

シェフィールド

二、一七五

(〇・四)

ハ  
ル

二、〇〇〇

(〇・六)

サウスエンド

一、五〇〇

(一・一)

最後に比較的多数のユダヤ人を擁し、ユダヤ教を奉ずるユダヤ人と回教を信奉するアラブ人との間に、バルフォア宣言を繞つて幾多の争闘の演ぜられたるバレスタインを眺めると、ここでは總數四十二萬四千三百人餘のユダヤ人が居り、首都エルサレムには八〇、〇〇〇人のユダヤ人が都市總人口の六一・五パーセントを形成してゐるが、寧ろ一五、八〇〇人のユダヤ人の居住するベタチ・テイクヴァ、七、三〇〇人のレホヴォ、五、八〇〇人のリスホン・ル・シオン、四、七〇〇人のヘデイラ、三、二〇〇人のナザニアの如き諸都市こそ、純然たるユダヤ人より成る都市なのである。

#### 四、政界に躍る人々

ギーゼレル・ウキジンはその著「大英帝國を支配する百家族」の序文の中で「英國はその國民が容認し支持する指導者のため自ら亡び裏ざられて居るのである。英國の貴族は過ぎにし光榮ある時代の死んだ習慣に隠れて、商賣、取引所、企業者、投機者等と懇親、緣故を結び、慾ばつたる仕事のため腐敗墮落し、世界を支配し搾取せんと焦慮して居る。これが英國の指導階級の真相である」(歐洲事情研究會譯書ニヨル)と述べてゐるのであるが、英國の政治が貴族寡頭政治なることは何人も異論のない所であらう。

上院にせよ、下院にせよ、これを構成する議員の殆んど大部分は土地所有者とか、諸會社の重役の地位を占めてゐるやうである。

而してユダヤ人もこれ等貴族の中に、或は政界の方面にと次第に侵蝕しつつあると云はれ、既にヴィクトリア女王時代には逸物と云はれたビーコンスフィールド伯爵、即ちユダヤ人、ベンジャミン・デイスレリ（一八〇四—一八八一）の如き人物も出てゐるのである。

當時、スエズ運河の株式の多くをフランスが所有してゐたのであつたが、彼はフランスの東洋に進出すべきを怖れ、終に一八七〇年に同じくユダヤ人たるライオネル・ロスチャイルド男爵の金融的援助を得て、エジプト副王イスマイル・パシャの財政窮乏に乗じて右運河の株式十七萬六千株（全株式の五分の三）を五百萬ポンドで買収したことは世に有名な話となつてゐる。

斯くて全英ファシスト同盟の一九三六年の調査によると、純ユダヤ系の貴族は三十八人であり、半ユダヤ系の貴族は四十五人、ユダヤ人と姻戚の關係にある貴族四

十名であつたと云はれてゐる。

今、ユダヤ人側の公表する所によつて、イギリスより従男爵の榮譽を與へられてゐるユダヤ人を擧げてみよう。

サー・ジュリアン・カーン

サー・ハーバート・コーエン

サー・バーシヴアル・デヴィッド

サー・オスモンド・ダヴィグドル・ゴールドスミッド

サー・バーシー・ハリス

サー・ジョージ・ジェッセル

サー・ジョージ・レオン

サー・トレシャム・レヴァー

サー・エワート・レヴィー

サー・ジョージ・ルウキス

サー・フィリップ・マグナス

サー・ライオネル・フィリップス

サー・レスリー・リチャードソン

サー・ヘンリー・ロスバンド

サー・エドワード・サミュエル

サー・ヴィクター・サースン

サー・ダブリュー・タック

次に同じくナイトの榮譽を有つてゐるユダヤ人は左の如き連中である。

サー・アドルフ・アブラハムス

サー・シドニー・アブラハムス

サー・マーティン・アブラハムソン

サー・モーリス・ブロック

サー・マックス・ボン

サー・モンターギユ・バートン

サー・フィリップ・カールバック

サー・アルバート・クレヴァリング

サー・ベンジャミン・コーエン

サー・ロバート・コーエン

サー・サミュエル・コーエン

サー・アルフレッド・ドコスタ



サー・エルンスト・デーヴィス

サー・ベンジャミン・ドレージ

サー・アルウイン・エズラ

サー・デヴィッド・エズラ

サー・レオナード・フランクリン

サー・サミュエル・グリユツクスタイン

サー・アラン・グリーン

サー・フイリツプ・ハルデイン

サー・ベンジャミン・ハンスフオード

サー・ヴィクター・ハラリ

サー・デヴィッド・ハリス

サー・フィリップ・ハートツグ

サー・フィリップ・ヘンリクス

サー・サミュエル・ジョセフ

サー・エリー・カドーリー

サー・セシル・キツシユ

アンドレ・モーロア

サー・ロバート・メイヤー

サー・チャールス・メンドル

サー・ジギスムンド・メンドル

サー・エドワード・メイヤー・スタイン

サー・エルンスト・オッペンハイマー

サー・フランシス・オッペンハイマー

サー・フランク・ポリッツァー

サー・アブラハム・レイズマン

サー・ロバート・ロロ

サー・チャールス・ローゼンタール

サー・イシドール・サルモン

サー・チャールス・セリグマン

サー・エム・スタイン

サー・ルイス・スターリング

サー・アルバート・スターン

さて茲で、議會の方面に眼を注ぐと、六百十五名の下院議員の中でユダヤ人は僅

かに十七名であつて、その内、保守黨に所屬する者は八名であり、勞働黨の者は六名、自由黨に屬する者三名で、次のやうな人々である。

(保守黨所屬)

エル・グリユック・スタイン

デイー・ジョール

テイー・レヴィー

デイー・リップソン

エー・リオンス

サー・アイ・サルモン

エム・サミユエル

エイチ・ストラウス

(勞働黨所屬)

デー・フランケル

エイチ・ネザン

イー・シンウエル

エル・シルキン

エス・シルヴァーマン

デー・ストラウス

(自由黨所屬)

サー・ピー・ハリス

エル・ホアペリーシャ

ジェームス・ロスチャイルド

他方、上院に籍を置く者は十名で、左の人々が見受けられる。

レツディング侯爵

ビーアステッド子爵

サミュエル子爵

ハースト男爵

ジエッセル男爵

マシクロフト男爵

メルケット男爵

ロスチャイルド男爵

スウエイスリング男爵

サウスウツド男爵

更に樞密顧問官には、左の四人のユダヤ人が任ぜられてゐることも注目しよ  
う。

レスリー・ホアベリーシヤ

サー・アイザック・アイザックス

サー・マイケル・マイヤース

サミュエル子爵

以上は英國の上層部に活動するユダヤ人について観たのであるが、議會の方面にはユダヤ人は驚くばかりに少數なるを知るであらう。故に論者、或は彼等がイギリスの國是を左右するには餘りに微力であると云ふ。

然しながら、ペーター・アルダーグ博士は「イギリス議會でユダヤ人の件について事を議する者は、殆ど例外なく彼等ユダヤに従屬する代議士のみといふ感じがす

る。これに關する實例を挙げれば際限がない。議會に於けるユダヤ問題に就いての發言を観ると、特に最近は殆んどすべての代議士は、その所屬する黨の何れたるを問はずユダヤの利益擁護に一致してゐる」と指摘してゐるのである。

蓋し、この國では特に政治には金が必要であるとは豫ねてから云はれてゐる所であるが、議會に於けるユダヤ人が假令、少數であつても、その背後に控えてゐるユダヤ金權によつて思ふがままに左右せらるることなしとは斷定することが出來ぬであらう。

最後に、政府部内を観てもユダヤ系官吏は相當多數に上るものの如く、官省の重要ポストに地位を占めてゐるユダヤ人としては、航空次官より、次いで土木相となつたサー・フィリップ・サスン（一八八八—一九三九）があり、彼の祖父アルバートは、上海のイギリス系ユダヤ財閥の大立者、サー・ヴィクター・ササンの祖



父エリアスの兄であり、且つフィリップ・サースンの母はパリのグスタヴ・ド・ロ  
スチャイルド男爵の娘であつたのである。

その他、元内相であつたハーバート・サミュエル子爵や、前陸相レスリー・ホア  
ペリーシャや、現在の大法官サー・ジョン・サイモンもユダヤ人である。

## 五、金融界の方面

第一次歐洲大戰の結果は、世界金融の中心として王座を誇るロンドンの金融市場  
も稍々重要性を失ひ、次第にニュー・ヨークによつて代られつつあるやうである  
が、それでも未だ侮るべからざる威力を持つてゐる。

英國の金融網なるものは全くロンドンに集中されてゐるのであつて、まづ英蘭銀  
行が嚴として中心に控え、これを繞つて五大銀行たるロイズ、ナショナル・プロヴ

インシアル、ミッドランド、ウェストミンスター、パークレイスの諸行や、割引商會、手形仲買人、引受商會、或はまたマーチャント・バンカー（個人銀行家）等を経て、茲に金融市場を形成する。

春日井薫氏は著書「英國の銀行及金融」の中でロンドン金融市場が今日の大を成すに至つた原因を指摘し「……………そして之等の人々の凡てに溢るゝ進取的精神と英國の天然の地の利と巨大なる資本力とを背景として今日の盛大をなしたものはあるが、この外に之等の人々を全く自由に活躍せしめ、ユダヤの異端者も伊太利の異人種も抱擁し、事實上世界の都市たらしめたる事は、金の自由市場を作りたる貨幣制度と相俟つて今日あらしめた主因である。即ち各方面に亘る自由の精神が貢獻せる所大なるを認めなければならぬ」と述べ、更に「所謂、金匠、或はロンバード人、或はユダヤ人の金貨なるものは、社會がその發生を要求したればこそ發生したもの

であつて、或はヘンリー八世により、或はチャールス二世に依り、その他事毎に加へられし爲政者の嚴重なる壓迫も彼等を絶滅することが出来なかつた。蓋し彼等の存在の根本に人と人との信用による連絡關係が嚴存して居つた」と論じて居られる。

たしかにユダヤ人の鞏固な團結、相互の緊密な連絡こそは、國家なく然かも今尙ほ民族としての誇りを維持し得る所以であつて、事實彼等は廣く海外の要人と連絡あり、經濟事情にも通じてゐたればこそ英國の繁榮を齎したのであると思はれる。またかのナポレオンの大陸封鎖をして顔色なからしめたのも、ロスチャイルド一族間の密貿易に負う所が大きかつたやうである。

一般にユダヤ人の英國への渡來は、ウィリアム一世の時代にさかのぼると云はれ、ロムバード街の歴史も、銀行業の創始者たるユダヤ種族のロムバード人が今のロム

バード街で金貸業を始めたに在ると傳へられてゐる。

さて、斯の如きユダヤ人の金融界に於ける勢力と云つても、寧ろマーチャント・バンカーや金銀市場の方面に華々しきものがある。

マーチャント・バンカー（個人銀行家）とは外國爲替手形の引受を行ひ、外國政府の國債の發行にも援助を與へる有力な機關で、自己の資金を以て營業し、ロンドンの財界では極めて大きな勢力を持つてゐる。

そして此のやうなマーチャント・バンカーの中で、ユダヤ系の主なるものとしては、次の如きものを擧げることが出來、多くはドイツ系である。

エヌ・エム・ロスチャイルド父子商會

サミュエル・モンターギユ商會

エム・サミュエル商會

## セリグマン兄弟商會

### エス・ジャフエツト商會

處が非ユダヤ系のものもかなりあつて、例へばシュロイダー、ハムブロス、ゴツシユン、シツブレイ、等のマーチャント・バンカーも列つてゐる。

斯くてポール・アインチヒは、國際的に重要な地位を占めてゐるものは僅かで、比較的ユダヤ人の勢力ある所はユダヤ人にして金銀市場のみであらうと述べてゐる。そこで金銀市場の方面を観ると、ロスチャイルド一門の外にサミュエル・モンターギユ商會とか、モカッタ・ゴールドスミッド商會のごときユダヤ人のものもあり、他方、シャープス・ウイルキンス商會や、ジョンソン・マッセイ商會、ピックスレー・アベル商會のやうな非ユダヤ系のものがあつて、いづれも毎朝十一時にロスチャイルドの事務所に集まつて、金の値段を決定するのである。

右の内デサミュエル・モンターギユ商會の如きは、これを主宰する者はユダヤ人スウエイスリング卿、即ちスチュアート・アルバート・サミュエル・モンターギユであつて、又その取締役にもエルンスト・ルイ・フランクリンがゐるのである。このユダヤ人もその母は第一代スウエイスリング卿の娘、ヘンリエッタである。

かやうに金融業者の一例を擧げててもその要所はユダヤ人の近親者によつて固められ、然も政界との關聯が密接であつて、驚くべき勢力を有することが知られよう。

次にイギリスに於いて、一銀行の銀行一と云はれる英蘭銀行を眺めると、ここの總裁はユダヤ人たるモンターギユ・コレット・ノルマンであり、一九二〇年以來の長きに亘つて勤續してゐる。

英蘭銀行は一六九四年に創立され、理事會と總裁と副總裁がこれを取締つてゐるのであつて、現在では千四百五十萬ポンドの資本金を持つてゐる。この銀行には二

有餘名の理事が居り、これ等の理事によつて總裁及び副總裁が選ばれるが、理事にはロスチャイルドの一門が相當多數任ぜられてゐるものの如く、然かもノルマンは二ヶ年を原則とする所の任期を完全に打破つてゐるのである。

彼は以前にはシツブレイ商會のバートナーとして活動してゐたが、その後、該銀行の副總裁となり、總裁カンリフ卿の死すると共に、始めて之に代つて總裁となつた。ジョン・ガンサーによると、金融問題を取扱ふ才能にかけては銀行でも彼の右に出るものがないと云ふ。

英蘭銀行はその内容を詳細に發表せずして濟むとの特許があり、登記所にも公の登記簿なく、大藏省の管轄外に置かれ、一般にはイギリス政府が株式の大半を所有してゐると云はれてゐるけれども、實際は國際金融に關係ある人々によつて指導されてゐるとアルダーグ博士は主張してゐる。

最後にここで五大銀行について述べてみよう。アルダーグ博士によると、次の如くユダヤ人がそれぞれ重役の地位を占めてゐると云ふ。

ロイズ銀行（資本金七千四百萬ポンド）

ビーアステッド子爵

ナシヨナル・プロヴィンシアル銀行（資本金六千萬ポンド）

サー・ヴィクター・シャスター

ミッドランド銀行（資本金四千五百二十萬ポンド）

サー・アルバート・スターン

ウエストミンスター銀行（資本金三千三百萬ポンド）

ゴツシエン卿

サー・ジョージ・シャスター



パークレイス銀行（資本金二千萬ポンド）

メルケット男爵

斯の如くして、イギリスの金融界では、特にマーチャント・バンカーとしての方面でユダヤ人の活動は大なるが如く、更に金銀市場の方面は一層顯著なるべしと觀られる。

M・G・マーチンは「英國のユダヤ人問題」の中で、世界の二大金産國たる南アフリカとソヴィエト聯邦では、その産地は全くユダヤ人に支配されて居り、例へばジョールとか、バルナトとか、ビート、ウルフ等の人々は凡べてユダヤ人で、その生産から販賣までも一貫して支配してゐると云ふことが出来るし、この點で、金に喰ふアメリカはユダヤ人によつて左右されると云ふも差支へないと論じてゐる。

南アフリカでは金、ダイヤモンドの採掘に従事する會社は殆んど凡べてユダヤ人

の手中に在ると云はれてゐる。彼の南アフリカの金鑛王と稱せらるるサー・エブ・ベイリーもユダヤ人であり、これ等ユダヤ人の動きこそ南アフリカの動向を決定するものとも云へるであらう。

## 六、産業部門に於けるユダヤ支配

### (イ) 通信及新聞事業

イギリスのロイテル通信社と、ドイツのデイー・エヌ・ビー通信社並びにフランスのアヴァス通信社とは、ヨーロッパの三大通信社として知られてゐる。

ロイテル通信社は又の名をルーターとも云ひ、さながらイギリスの國家的な機關たるかの如き勢力があつて、多分にイギリス的な色彩が濃厚で、外交宣傳にも重要な役割を演じてゐる。

この通信社はフランスのアヴァスやアメリカのユニナイテッド・プレスとかアツンシエーテッド・プレスとも連絡が密接で、第一次大戦當時に於いては世界の通信網を一手にその掌中に收めてゐるかのやうであつた。

處がこのロイテル通信社こそユダヤ名ヤコブ・ヨザファートのポール・ジュリアス・ヴォン・ロイテル（一八二一—一八九七）によつてバリに創始せられ、一八五一年にロンドンに本據を移されたもので、彼の後繼者ヘルバート男爵は一九一五年に死し、その後サー・ロ德里ック・ジョーンズを経て、今日では下院議員のサミュエル・ストーリーが指揮を採つてゐる。

昨年七月二十九日、同社の通信員エム・ジェー・コックスの自殺事件は未だに我々の耳に新たなところであらう。

次に右のロイテル通信社によつてニュースの供給を受けてゐる諸新聞に於けるユ

ダヤ人の勢力を窺つてみよう。

イギリスでは、新聞界には三つの大きなグループがあつて、實に同國の新聞の七十五パーセントを支配してゐると云はれる。

三大グループとは、デーリー・メール、イヴニング・ニュース、サンデー・デイ  
スバッチ等の諸新聞を機關とし、ロザミア卿（先代はノースクリフ卿の弟で、一九  
四〇年十一月に物故した）を總帥と仰ぐアツソシエテド社であり、それからデー  
リー・テレグラフ、モーニング・ポスト、マンチエスター・ガーディアン、デーリ  
ー・デイスバッチ、アスレテイツク・ニュース、サンデー・クロニクル、スポーテ  
イング・クロニクル・エムバイア・ニュース、フィナンシアル・タイムス等を機關  
とし、マリー家やケムスレイ卿や、キヤムローズ卿によつて支配されるアライド社  
があり、更にまたニュース・クロニクル、スター等を發行し、サー・ハーバート・

グロトリアンによつて指揮を受けてゐるプロヴィンシアル社がある。

斯の如き諸新聞の中で、デーリー・メールは一八九六年に創刊となり、今日では二百萬部の發行を見てゐるが、然かも茲にはロザミア卿の外に、ユダヤ人としてはロスチャイルド若しくは船成金であるサー・ジョン・エラーマンの如き人物が背後にゐるであらうとの評があるのである。

又デーリー・テレグラフ紙は一八五五年に發刊されたもので、その發行部數は五十萬部に及んでゐるのであるが、もとユダヤ人、ジエー・レヴィーによつて大を成すに至つたものであり、その後ベリー家に譲り渡されたが、ここにケムスレイ卿の子息がライオネル・ロスチャイルド男爵の娘と結婚してゐるので、當然この新聞にはロスチャイルド家の勢力も加はつてゐると云はれてゐる。

それからニユース・クロニクル紙は、一八四六年に創刊され、正に發行部數百五

十萬部であり、自由黨の機關新聞でもある。首腦にはグロトリアンが据つてゐるが、この新聞は豫ねてからナチスの排ユダヤ政策を攻撃してゐるから、或はユダヤ系であらうかと観る者もあるやうである。

然るに右の三大グループの外に、尙ほオーダムス・プレスの一群がある。

これこそ正にユダヤ人、サウスウッド男爵の支配下に在るものであつて、デーリー・ヘラルドとか、ピープルとか、スポーティング・ライフ、その他幾多の週刊紙をも發行してゐるのであるが、とり分け、デーリー・ヘラルドは労働黨の機關新聞であり、一九一二年の創刊で、發行部數五十萬部、外交問題の通信部にはエー・イースターマンと云ふユダヤ人が控えてゐる。

かやうに、ユダヤ系の色彩の最も明らかなものはオーダムス・プレスの一團であり、然かも先代のサー・ジョン・エラーマンの助力もあつたのであるけれども、そ

の他ビーヴァーブルック卿の主宰するデーリー・エクスプレスも見逃がすことは出来ぬ。

この新聞は一九〇〇年の發刊で、百萬部の發行部數を持つて居り、主筆はユダヤ人たるアール・ブルーメンフェルドであつて、ビーヴァーブルック卿もまたユダヤ人たるメルケット男爵とは交友密なるが如くであると云ふ。

#### (ロ) 映畫事業

イギリスの映畫事業が殆んど世界的に濶歩してゐたのは第一次大戰までのことであつた。

即ち第一次大戰後に及ぶと全くアメリカによつて世界の市場を奪はれたかの如くで、イギリス自身すら、映畫の八割まではイギリスから輸入する始末であつた。

そこで一九二八年には、上映する映畫の約二割までは必ず國産品を以てすべしと

の法律が現はれ、次いで監督や俳優をアメリカやドイツ、フランス等の諸國から招いて急速な活氣を見て今日に至つてゐるが、未だアメリカの映畫と比較すると著しく國際性が乏しいやうである。

故にそれだけに、又この國の映畫事業は、ユダヤ人の左右する映畫の國アメリカの容易に乗ずる所ともなり、現在ではアメリカのユダヤ資本による映畫會社もあればイギリス系の會社もある。

例へばバラマウント・ブリテイッシュユや、フォックス・ブリテイッシュユ、ウォーナー・ブラザース、ファースト・ナショナル等は前者に屬し、ゴーマン・ブリテイッシュユ、オデオン・シアター、アッソシエーテッド・ブリテイッシュユ等の諸會社は後者に屬し、然も多くはユダヤ人が首腦となつてゐる。

この中でゴーマン・ブリテイッシュユ會社は最も有力なもので、一九一四年にフラ



ンス・ゴーモン會社の支社として出來たものであるけれども、これぞポーランドからイギリスに到來した、一八八九年生れのユダヤ人、イシドール・オストラを社長に、又その兄弟のマーク・モーリス等を重役として經營され、新興のブリテイッシュ・インストラクショナルやデンマン・ピクチャー・ハウス、イレクトリカル・フォノ・フィルム等の諸會社を傍系に従へ、多くの直營映畫館をも所有してゐる。

次に八十有餘の映畫館を持つオデオン・シアターはゴーモン・ブリテイッシュとの合同計畫の噂もあつたやうであるが、その社長は一八九三年にバーミンガムに生れたユダヤ人、オスカー・ドイッチェであつて、重役のエム・シルヴァーストーンもユダヤ人である。

フィナンシアル・ニュースの報する所によれば、最近二ケ年のゴーモン・ブリテイッシュやオデオン・シアター、アッソシエテド・ブリテイッシュ等の諸會社の

純利益（税額控除）は左の如くである。

（一九四〇年）

（一九三九年）

ゴーマン・ブリテイッシュユ

二二二、六〇八ポンド    二九七、三八七ポンド

オデオン・シアター

一九八、六一八同    三〇三、六六八同

アッソシエード・ブリテイッシュユ

二一三、六一四同    六二七、七五一同

（ハ）その他の企業

まづ石油工業の方面を観ると、シエル運送貿易會社が最も有力である。この會社は一八九七年に資本金百八十萬ポンドを以てユダヤ人、サー・マーカス・サミュエル（一八五三—一九二七）によつて設立されたものであるが、この裏面にはロスチャイルド家の多大の援助があつたと云はれてゐる。

シエルとはつまり貝殻の意味で、その商標たるが爲にこの名があり、數多の石油

會社の持株會社となつてゐる。

この會社と、他方の、ロスチャイルドの資本によりヘンリー・デターディングの手によつて生れたオランダのロイヤル・ダッチとの角逐は有名なものであるが、一九〇七年に兩者は並立の形で合併の運びとなり、フィリップス、マレー、タイ、インド、メキシコ等の幾多の石油會社を支配してゐる。

斯くてマークス・サミュエルはピアステッド卿となり、子爵にも列せられたのであるが、彼はまたロンドンの執行官や市長にも任ぜられた。

今では彼の事業はその子ウオルター・ホレースによつて繼承され、同社の重役には同じくユダヤ人のサー・ロバート・ウエーリー・コーエンも見出される。

次に化學工業界では帝國化學工業會社イムピリアル・ケミカル・インダストリーが光つてゐる。この會社はイギリス最大の軍需會社でもあつて、サー・アルフレッド・モリッツ・モンド（一八六八—一九

三〇）、即ちメルケット卿の手によるブラナー・モンド、ノーベル工業、ブリテン染料、合同アルカリの四社合同の所産であり、一つのコンツェルンを作成したのは一九二七年のことであつた。

現在では長男のヘンリー男爵が支配してゐるが、彼はまた上院の一員であり、石炭業にも關係があり、パークレイス銀行、カナダ國際ニッケル會社、バレストイン電氣會社等の重役をも兼ねてゐる。ギーゼレル・ウキジングの述べる所によれば、ゼットランド侯やサー・ジョン・サイモンは右の帝國化學工業會社の大株主であると云ふ。

また海運業の方面ではサー・ジョン・エラーマンの勢力が大きい。

イギリスの海運界ではピー・オー系とロイアル・メール系、ホルト系並びにエラーマン系が王者として臨んでゐるのであつて、一九三〇年に没したる先代のエラー

マンは能く一代で今日の基礎を築き上げたのである。

彼の遺産は正に三千六百六十八萬四千九百九十四ポンドで、この莫大な財産を相續した現當主のエラーマンは千八百萬ポンドの課税を支拂つたと傳へられてゐる。

今やエラーマン系の船舶會社は合計七社で、その所有船舶は百三十五隻、六十四萬四千百六十六總噸である。

現在のエラーマンも父に劣らぬ傑物の如くで、ユダヤ的な蓄財の才があり、醸造業や出版業にも投資してゐる。

以上はイギリスの産業界に進出してゐるユダヤ人のほんの一斑を窺つたに過ぎないが、この他にも、保險業に於いては、アライアンス・アッシュユアランス會社に對するロスチャイルド家があり、食料品工業では、ホーム・エンド・コロニアル・ス

トアーズやリブトン會社に對するサー・ジョージ・シヤスターが居り、ウールワースに次ぐ均一店としてマークス・スペンサーがあり、更にまたチエーン・ストアーの資本總額の八分の一までは明らかにユダヤ人の所有する所と云はれ、枚舉にいとまなき状態であつて、今ではこの國の基礎産業は漸やく衰退しつつあるとは云ひながら、イギリスが能く世界最古の工業國として世界の富を吸収することの出來たのも、ユダヤ人に負う所が少なくないであらう。

## 七、支那のサスーン財閥

歴史家の觀る所によると、ユダヤ人は古く漢の時代から支那に來り住んでゐると云ふ。

とり分け、英國系のユダヤ人は早くから支那に結び付き、かの幣制改革も實はユ

ダヤ人のフレデリック・リースロスを中心とし、ユダヤ財閥の意のまゝに動かされたものであつたと云はれてゐる。

今ではイギリス系のユダヤ財閥の巨頭たるサー・エリアス・ヴィクター・サスンは同時に世界的な大財閥であり、支那の大立て者であり、支那に於けるハードン、エズラ、アーノルドのごとき財閥の中に在つて一段と頭角を露はし、「東洋のロスチャイルド」の名があるのである。

彼は實に蔣政權の支配者であり、法幣の支持者であり、浙江財閥の後ろ楯と觀られて居り、最近はいンド支那産米の買占めによる對日攻勢も噂に上つたが、一昨年の七月三十一日には「ホノルル・クリッパー」號でニュー・ヨークへ渡り、同地の新聞記者團との會見の席上で、人口過剰の日本は必らずや南米を捌け口として選ぶであらうと警告したと報ぜられてゐる。

彼は又同年十月十九日にはイギリスの戦時基金として百萬ドルを寄附してゐるのである。

尤も彼のアメリカに於ける日本誹謗を以て直ちに在支ユダヤ人全體の聲と考へることは出来ない。例へばエム・スピールマンは「U・P電の報するサースンの對日暴言は全く信する事が出来ない。以前にも同様なことがあり、サースンを大いに迷惑がらせたことがあるが、今回も恐らく何かの間違ひではなからうか。何れにしても我々在滬ユダヤ人が日本を心の友とし、難民らが上海に到着して以來受けた數々の好誼に對しては心から感謝してゐる」と辯明してゐると云ふ。

（時局情報、昭和十五年七月號、西尾示郎氏ニヨル記事）

兎もあれ、サースン財閥が經濟的に支那を支配しつつあることは事實であつて、既にその投資額は數十億元に及んでゐるのである。



このサスーン家なるものは、遠くはスペインを逐はれてサロニカに土着したジョセフ・ベン・ソロモン・ソスシャンに遡ぼり、彼は又第十六世紀にバグダッドに移住したのであつた。

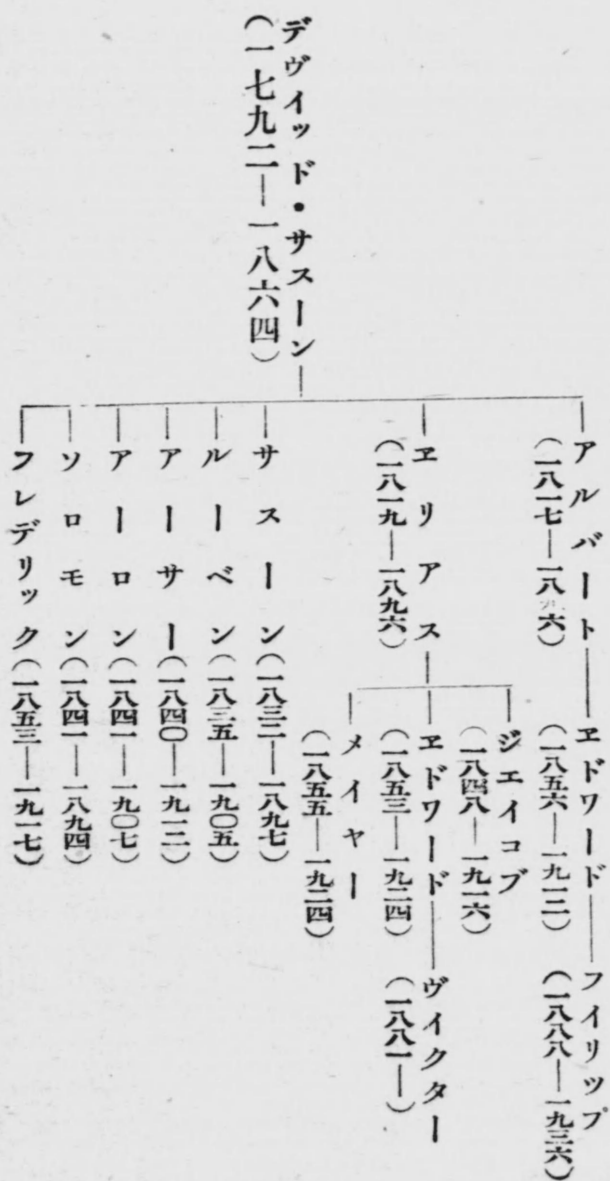
斯くて一七九二年に一商人の子としてバグダットに生れたのがデヴィッド・サスーンであつて、金融や貿易の事業に従事し、一八三二年にはその本據をバスラに、次いでボンベイに移してデヴィッド・サスーン商會を創立し、阿片の貿易を一手に行つた。

その支店はカルカタ、上海、廣東、香港等に設けられ、その活動區域は長崎、横濱、インド、支那等に跨がるものであつたと云はれる。

このデヴィッドが即ちサスーン家の始祖として一般に觀られて居り、彼には八人の男子と數人の女子があつて、これ等の子女が各地に分散して、茲に今日のサスー

ン財閥を形成する端緒が開かれることはなつたのである。

今その家系を略記すれば次の如くである。



右の内、デヴィッド・サスーンの長子であるアルバート・アブダラー・デヴィッド・サスーンの系統が即ちサスーン本家で、アルバートはデヴィッド・サスーン商會の長として父の業を受け継ぎ、その他ボンベイの發展や慈善事業にも盡力する所が大きく、從男爵にも叙せられた。

また彼の子エドワード・アルバート・サスーンは政界に入り、下院議員として活動した。エドワードの妻は既に第四項に於いて述べたやうに、バリのロスチャイルド家から嫁したものであつて、この間に生れたサー・フィリップ・デヴィッド・サスーンは英國の航空次官となり、土木相となつた人物である。

處がこのフィリップには子供がなく、その死するや總額百九十四萬六千八百九十二ポンドに達する彼の遺産の大部分は社會事業その他に供與され、残りの一部分が彼の妹、レーデイー・シヨモンデリーに譲られたのである。

斯くの如くサスーン本家は寧ろ政界の方面へと次第に進出して行つたわけであり、サスーン家の始祖デヴィッドの次男、サー・エリアス・デヴィッド・サスーンに始まる所の分家の方が實業界に伸びて行つたのである。

エリアスはサスーン家の内で支那に渡つた最初の者であつた。彼は一八四四年には父より離れて香港や上海にデヴィッド・サスーン商會の支店を開設し、降つて一八六七年には自らE・D・サスーン商會を創始し、これはボンベイに本店があつたが、上海や香港にも支店を有するものであつた。

また彼の子ジェイコブ・エリアス・サスーンの活躍は父に勝る目覺ましきものがあつて、支那で事業を擴張したことは勿論であるが、更に西インドの綿業開發にも貢獻した所が少なくなく、その従業員は一萬五千人と傳へられ、その他、バレスタインやインドで社會事業にも奔走し、一九〇九年にはナイトに叙せられたのである。

このジエイコブの死後は、弟のエドワード・エリアス・サスーンによつて事業を引き繼がれ、現在ではエドワードの子であるサー・エリアス・ヴィクター・サスーンが當主であり、サスーン財閥の領袖として上海に君臨してゐるのである。

故に現在の上海には同じサスーン系のデヴィッド・サスーン商會（本店はロンドン）とE・D・サスーン商會（本店はボンベイ）との二つの支店が存するわけであるが、土地賣買や貸家、不動産の管理等に當る前者は支那語で（老沙遜）と云はれ、國際金融投資、サスーン團の不動産管理等を行ふ後者は「新沙遜」と稱へられ、而してこの兩者を統轄する本部はロンドンのプリンス街に置かれてゐる。

エリアス・ヴィクター・サスーンは一八八一年にヨークシャイアに生れ、ハロー校、ケンブリッジ大學の出身で第二代の從男爵であるが、足は不自由であり、二百五十頭に及ぶ駿馬の所有者として競馬界にも知られて居り、その豪華な饗宴には各

國政界、財界の要人が集まることを以て有名である。

一般にユダヤ人は五十年を一期として投資を行ふが、最初の二十五ヶ年間は専ら投資期であつて、後半の二十五ヶ年が回收期であると云はれてゐる。

サスーン家が支那に投資するに至つたのは、一九一七年に香港政廳の會社法に基いて設立され、當時に在つて外國貿易、保險、海運の方面に手廣く進出してゐた所のアーノールド兄弟商會が爲替の急激な變動に遭つて破産に瀕することとなり、終にサスーン家に救助を求めたのが動機であると云はれる。

次いでサスーン家は一九二五年には地産の賣買や投資、金融等を營業種目とする遠東公司を、一九二六年にはカセイ・ホテルを、一九三〇年には中國國際投資信託公司を經營することとなり、斯くして次第に支那の經濟界に歩を進めて行つた。

一九三〇年に設立され、香港に本店を、ロンドン、上海、ボンベイに支店を持つ

サスーン・バンキング・コーポレーション（沙遜銀行）はサスーン財閥自體の機關ではあるが、英蘭銀行や香港上海銀行を親銀行としてゐると云はれてゐる。

斯様にサスーン家は漸次に支那の事業に手を染めて行つたのであるけれども、つとめて堅實なる投資の途を選び、特に公共事業の方面に主力を注ぐものの如くである。

今やサスーン財閥の資産は三十億元と觀る者もあり、五十億元との説もあるが、在來のイギリス系の支那に於ける大財閥たる怡和洋行や太古洋行も遙か下位に在るやうである。

今ここにサスーン財閥の關係する主なる會社を列舉すれば左の通りである。

（イ）投資支配會社

揚子銀公司

中國國際投資信託公司

中國鋼車製造公司

上海啤酒公司

(口) 直接投資經營會社

華懋洋行

華懋飯店

上海造船廠

祥泰木行公司

中國公共汽車公司

(八) 直接經營會社

中和產業公司



安利洋行

(ニ) 投資關係會社

業廣公司

茂泰公司

會德豐洋行

霍葛鋼品公司

正廣和洋行

以上はサスーン財閥の概要であるが、ここに一九三九年七月三十一日のニュー・ヨーク發同盟を引用して、サー・エリス・ヴィクター・サスーンの支那事變に關する左の如き談話を掲げることも興味があらう。

「世界情勢が現在のやうであれば、若し予が日本人であつたとしても矢張りこの

機逸すべからずと考へたであらう。日本國民は目下愛國心が燃え盛つてゐるからわれわれとしても當分日本軍に逆らつて行動することは出来ない。われ等はむしろこの際日本を憤激させないやうに努力する必要がある。この意味で米國が通商條約を突如廢棄したことについては恐らく米國々内にも異論があつたらうと思はれる」

## 八、代表的人物の素描

### (イ) 政 治 界

サー・アルフレッド・アイザック・アイザックス（一八五五—）

オーストラリアのメルボルンに生れ、メルボルン大學の法律科の出身である。一八九三年にはヴィクトリアの檢事次長となり、翌年には檢事總長に昇進し、更に一九〇六年には最高法院の判事となり、進んで一九三一年にはオーストラリア總督と

なつた。現在では樞密顧問官に任ぜられてゐる。

サミュエル子爵（一八七〇—）

（ハーバート・ルイ・サミュエル）

生粹のロンドン生れのユダヤ人である。

エドウィン・サミュエルの子で、哲學者であるが、寧ろ政治家として名が高い。

彼が自由黨員として議會に入つたのは一九〇二年のことであるが、やがて黨を代表するに至つた。

一九一六年と一九三八年の兩度に亘つて内相に任ぜられたが、その他、英國統計學會の會長や、バレスタイン高等辨務官にも任ぜられた。

現在は上院の一員であり、樞密顧問官でもあつて、彼こそ政界の最も有力なユダ

ヤ人と云つて差支へないであらう。

マンクロフト男爵（一八七二—）

（サー・アーサー・マイケル・サミュエル）

ベンジャミン・サミュエルの子としてノーウイツチに生れた。

一九一二年ヨリ一九一三年までノーウイツチの市長に推され、一九二七年より一九二九まで大藏省財務次長に任ぜられた。現在では上院の一員として活動してゐる。

サー・ジョン・サイモン（一八七三—）

エドウィン・サイモンの子である。一九〇六年に自由黨から下院議員に選出され、

間もなく右の政黨の指導者となつた。

一九一五年より一九一六年に至るまで内相に、一九三一年と一九三五年の兩年は外相の地位に就き、一九三七年には藏相となつたが今や大法官の要職に在る。

一九三九年十二月四日には、彼がフランスのレイノー藏相を訪れ、兩國間の經濟協定を結んだと傳へられたが、これは結局ユダヤ人相互間の協定と云ふことも出来よう。

サウスウツド男爵（一八七三—）

（ジュリアス・ソルター・エリアス）

新聞事業の經營や出版の方面でも有名な人物である。

彼はオーダムス・プレスを支配し、デーリー・ヘラルドやイラストレーテド新聞

をその管轄下に置いてゐる。

一九三九年には廣告協會の會長に推され、今では上院にも籍を置いてゐる。

サー・マイケル・マイヤース（一八七三—）

ユダ・マイヤースの子で、ニュー・ジラランドに生れ、ウエリントン大學の出身である。

一九二九年にはニュー・ジラランドの司法行政に従事したが、一九三五年まで同國の行政長官となり、現在は樞密顧問官である。

サー・セシル・キツシュ（一八八四—）

インド行政で名のあつたヘルマン・キツシュの長男であつて、オックスフォード

に學び、一九一七年にはインド事務大臣の私設祕書となり、時の長官エドウィン・サミュエル・モンターギユの片腕とした活動した。

彼は又バリの平和會議に出席したり、インドの幣制改革にも參畫した。一九三三年以來はインド事務次官補に任ぜられてゐる。

レッディング侯爵（一八八九—）

（ジェラルド・ルフアス・アイザックス）

検事總長、大審院長、外務大臣等に歴任し、ユダヤ人空前の政治家と云はれた第一代レッディング侯爵ルフアス・ダニエルの子で、ロンドンに生れた。

彼は辯護士であり、マンチエスターのマルティン銀行の重役であり、且つ現在は上院議員としても活動してゐる。

彼は又第一次歐洲大戰にも參加したことがあり、その妻エヴァ・ヴァイオレットは第一代メルケット男爵の娘である。

レスリー・ホアベリーシャ（一八九六—）

一九二三年に始めて自由黨の一員として下院に入つた。一九三四年には運輸相となり、一九三六年にチェムバレン内閣の陸相に任ぜられたのであるが、一九四〇年一月の内閣改造に當つてマツクミラン情報相と共に辭職した。

そしてこの原因に就いては、英國極東派遣軍ゴート大將との政策上の意見對立とか、陸軍の民衆化が禍したとも傳へられたのであるが、彼を惜しむ輿論が沸騰し、議會には波瀾が捲き起されたのであつた。

事實、彼の政治的手腕には目覺ましきものがあり、當代のビーコンスフィールド



伯爵（ベンジャミン・デイスレリ）であるとして、「ベリシャ・ビーコン」の名もあつた位である。

今では下院の一人であり、樞密顧問官にも任ぜられてゐるのであるが、一九四〇年八月二十日の下院に於いては英米協同政策を力説し、一九四一年五月六日の下院ではチャーチル首相との間に戦車の不足を繞る責任擦すり合ひの猛烈な論戦が行はれたと云はれてゐる。

#### （ロ） 經濟界

セミー・ジャフエット（一八五八—）  
フランクフルト生れの銀行家である。今やユダヤ系のマーチャント・バンカーたるエス・ジャフエット商會を經營しつつある。

ジャック・バルナト・ジョール（一八六二—）

南アフリカに於て彼のセシル・ローズと猛烈に競争したバーネット・アイザック・バルナト（一八五二—一八九七）の甥に當り、南アフリカの多數の金鑛を所有し、ヨハネスブルグ合同投資會社の社長であつて、ダイヤモンドの會社にも關係して居り、合計四千三百萬ポンドに達する四十五會社を統率してゐる。

下院議員のダッドレー・バルナト・ジョール（一九〇四—）は彼の從兄弟である。

ハースト男爵（一八六三—）

（フリーゴー・ハースト）

英國工業聯盟の會長に任ぜられたことがあるが、現在ではジエネラル・イレクトリック會社の社長であり、上院議員である。

サー・エブ・ベイリー（一八六四—）

ケープ植民地のクラドックの生れで、トランスヴァールの主要な金鑛所有者の一人に數へられてゐる。

第一代の從男爵で、上海のサー・エリアス・ヴィクター・サスンと並んで駿馬の持主として競馬界に名がある。

サー・チャールス・セリグマン（一八六九—）

アイザック・セリグマンの長子としてロンドンに生れ、マーチャント・バンカーたるセリグマン兄弟商會の首腦である。

モンターギユ・コレット・ノルマン（一八七一—）

エフ・エイチ・ノルマンの子で、イートン、キングス・カレッヂ、ケンブリッヂに學び、一九二〇年以來英蘭銀行に勤務して居り、一九〇〇年には南阿戰爭にも參加した。

今や英蘭銀行の總裁としてイギリスの政治をも左右し得るかの權力を持つてゐるが、彼はあたかもサー・ヴィクター・サスンと同じく、人と面接するを避けてゐると云はれてゐるのであつて、その風格に就いて櫻澤如一氏は次のごとく語つて居られる。

「未だ曾て此の人を見た人がありません。寫眞を見た新聞記者がない。全世界何處の新聞社通信社を探しましても、モンターギュー・ノルマンの寫眞がない。見る人は勿論ない。朝ベルリンに居るかと思ふと、晝はバリーで飯を喰つてゐる。夜は地中海のヨットの中で寢てゐると云ふ風で、新聞記者は未だ曾て、近付いたことがあ

りませぬ。日本でも昔深井英五さんが會ひに行かれたことがあつたさうですが、會へなかつたとか何とかで非常に難儀だつたらしい」

サー・ロバート・ウエーリー・コーエン（一八七七—）

ナタニエル・ルイ・コーエンの子で、ロンドンに生れた。

錚々たる實業家であつて、ビアステッド子爵の下にシエル運送貿易會社の専務取締役として重きを爲してゐるが、その他バレストイン電氣會社や、英埃石油會社、トリニダッド石油會社等の社長であり、ボールドウィン會社の重役をも兼ねてゐる。

サー・アルバート・スターン（一八七八—）

ジエームス・ターンの次男で、五大銀行の一つであるミッドランド銀行の重役で

あるが、更にスターン兄弟商會の社長や、ガーディアン保險會社の重役の地位に在る。曾て軍需省に勤務したことがある。

ビアステッド子爵（一八八二—）

（ウォルター・ホレース・サミュエル）

第一代のビアステッド子爵、サー・マーカス・サミュエルの子で、第一次歐洲大戦にも參加した。現在はシエル運送貿易會社の社長で、上院議員である。

インドール・オストラー（一八八九—）

ネザン・オストラーの子である。以前はロンドン株式取引所やマーチャント・バンクカーたるオストラー兄弟商會にも關係したが、今は映畫會社、ゴémon・ブリテ

イツシユの社長となつてゐる。

オスカー・ドイッチェ（一八九三—）

バーミンガムの生れである。オデオン・シアター會社の社長であるが、他方、バーミンガムのユダヤ人を代表して活動してゐる。

メルケット男爵（二八九八—）

（ヘンリー・メルケット）

第一代メルケット卿、サー・アルフレッド・モンドの子で、ロンドンに生れた。銀行家であり、會社の重役であつて、パークレイス銀行、帝國化學工業會社、カナダ國際ニッケル會社、バレストアイン電氣會社等をも支配してゐる。上院議員の一人

である。

スウエイスリング男爵（一八九八―）

（スチュアート・アルバート・サミュエル・モンターギュー）

第二代スウエイスリング男爵の長男で、ケンブリッヂ大學の出身である。

サミュエル・モンターギュー商會のパートナーであつて、上院に籍を置いてゐる。

サー・ジョン・リーヴズ・エラーマン（一九〇九―）

サー・ジョージ・エラーマンの一粒種で、從男爵にして海運界の重鎮である。

ロスチャイルド男爵（一九一〇―）

（ナタニエル・メイヤー・ヴァイクター・ロスチャイルド）



ナタニエル・チャールス・ロスチャイルドの次男で、エヌ・エム・ロスチャイルド商會の當主である。

ケンブリッジ大學の出身で、昆蟲の蒐集に興味を持つ科學者でもあり、家業には餘り身を入れぬとも云はれてゐるのであるが、同家の地盤は牢固たるものであるから、依然、ユダヤ金權の總帥と云へやう。上院議員の一人である。

サー・アルフレッド・レーン・ビート（一九二四—）

南アフリカの金融業者にして慈善家であり、セシル・ローズと共にダイヤモンドの採掘に従事したアルフレッド・ビートの子としてロンドンに生れた。

第二代従男爵であり、金鑛を所有し、ローデシア鐵道會社やビート鐵道トラストを支配してゐる。

## むすび

今次の歐洲大戰は、正に全體の利益よりも個人の利益を追求しようとするイギリスのユダヤ金融寡頭の支配に對するナチスの一大警鐘といふことが出来る。

誠にユダヤ人の問題は世界の癌であつて、その適當なる對策は講ぜねばならぬと思はれる。

彼等ユダヤ人は、成る程その環境によつて身も心も共に甚だしく歪められたことは事實であらう。

或る論者はユダヤ人を日本人やドイツ人と比較し、日本人は目先はよく利くけれども組織力と持續に於いて劣り、ドイツ人は目先きは利かないけれども堅實と組織力で堪へ、ユダヤ人はこの兩者の長をよく兼ね具へてゐると論定してゐる。

果して然らば、期せずして何故に各國にユダヤ人憎惡の焰が燃え上るかが彼等ユダヤ人に了解出來ぬ筈はないのであつて、彼等の齎らした今日の悲慘が能く彼等を覺醒せしむるの機縁ともなれば幸である。

ウインダム・ルイスは「全ユダヤ人に共通する何かがあるのだ。それは特に犯罪的と云ふことではない。恐らく數世紀に亘る埒外に置かれた身の上から來た反社會的な何物かなのである」と述べて居り、ウィリアム・ジョイスはまた「此の過去數年に亘るユダヤ人の國際金融支配は、如何なる戰爭よりも測り知れぬ程遙かに殘忍であつた」と斷定してゐるのである。

夙に英國に於いてすら反ユダヤの烽火も上つてゐるのであつて、オスワルド・モズレー卿などは「今次の大戦こそは實はユダヤ人の惹起した戰爭であり、ユダヤ金融業者の御先棒をかつぐ連中が戰爭を挑發した」とその主宰するアクション紙の中

で喝破してゐる。

之を要するに、彼等の心からなる反省と、列國の之に對する適宜なる指導とによつて、合理的な解決が與へられ、延いては國民經濟の安定が期せらるることともなるならば、今次の大戦は却つて重要な意義を有つことになるであらう。

——(完)——

昭和十六年九月一日 印刷  
昭和十六年九月五日 發行

【國際秘密力研究叢書第十一冊】  
英國を支配するユタヤカ

定價金五十錢

著者

鹿島

健

東京市麴町區內幸町二ノ三〇一

蘇理伊太郎

發行人兼  
印刷所

東京市芝區田村町六ノ一

秀美堂印刷株式會社

印刷所

東京市麴町區內幸町二ノ三（幸ビル）

發行所

政經書房

振替口座東京一三七五八三番  
電話銀座一二一八番

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

版	所
權	有

# 國際政經學會監修

## 猶太問題研究叢書

安江仙弘著	ユダヤの人々	定價 壹圓 送料 九錢
英國陸軍中佐 G・S・ハッチスン著 後藤富男譯	世界大戰並に歐洲政局を繞る 猶太秘密力の裏工作	定價 七十錢 送料 六錢
貴族院議員 赤池濃著	支那事變と猶太人	定價 六十錢 送料 六錢
佛國J・ド・ボアステル著 國際政經學會譯	國際ロータリー俱樂部と マソン結社	定價 六十錢 送料 六錢
佛國J・トウール著 マンタル著 國際政經學會譯	マソン結社の組織と秘密	定價 六十錢 送料 六錢
獨逸R・コンモス著 福迫勇雄著	スターリン背後の猶太人	定價 四十錢 送料 十四錢
愛宕北山譯編	世界の秘密	定價 五十錢 送料 十四錢
佛國ジョセフ・サント著 國際政經學會譯	フランス敗亡と 猶太金權秘密力	定價 五十錢 送料 九錢
國際政經學會 調查部編	裏のニユー・ス	定價 五十錢 送料 十四錢

電話銀座二一八番  
振替東京一三七五八番

政經書房

東京市麴町區  
內幸町幸ルビ

誌雜究研力密秘際國刊既

國際秘密力の研究	國際秘密力の研究	國際秘密力の研究	國際秘密力の研究	國際秘密力の研究	國際秘密力の研究
1	2	3	4	5	6
四一〇頁	二八六頁	四三七頁	三三七頁	四二〇頁	二六一頁

上記殘部本會にあり。

非賣品なれども、特に

御希望の方には各卷一

部參圖を以て分賣す。

(送料各十錢)

増田正雄監修

月刊 猶太研究

會員頒布  
年額十二圓

我國に於ける唯一の猶太問題研究雜誌

猶太研究は斷じて獵奇乃至考證學的古典研究ではない。最も生々しい現實の面からも未だ解決せられざる問題である。變轉極まりなき現代世界の政治・經濟・外交・文化その他一切の事象悉く猶太力の反映ならざるはない。今や世人の視聽は為き世界の推進理論と秩序との一大轉換を決定するところ深遠、直面するところの緊切なるこの問題に對し果して幾何の關心が寄せられ來るとをわれらは憂ふ。今は徒らに「複雑怪奇」と歎して済まず秋ではない。これを闡明克服するやと國際情勢に對する透徹せる觀察と精確なる認識の窓を開くべき秋だ。

(趣意書贈呈)

國際政經學會

東京市麴町區  
内幸町三丁目

電話銀座一八二番  
振替一八八五八番

『日本に還れ!』この言葉こそ、一億の日本人が、外に對して八紘一字の大精神を顯現し、内にあつては「神ながらの道」を實踐する合言葉であり、これぞ高千穂の靈峯より響く天の聲である。

本書は、その還るべき神國日本の眞髓を説くに極めて平易、しかも興味津津たる比喻と示唆に富む歐米思想文化との異同を辯じ、卑近の事實を捉へて諷刺奇警、『人生觀、世界觀について私と同じ悩みを抱いてをられる讀者に、私のさゝやかな心の歡喜を分つことが出来れば、これ以上のよろこびはありません』と、著者はいつてゐる。敢て江湖の座右にこの一書を捧げる所以である。

滋賀多喜雄著

# 日本に還れ

定價 一圓

(送料六錢)

近頃いはれてゐる高度國防國家建設とか、東亞共榮圈の確立とか、大政翼賛とかいふことを申しますが、神國日本の所以を知らなくては、その實現は斷じて期待出来ません。

何となれば神國とは神髓の國といふことで、神髓は、宇宙萬物のあり方として最も自然な而も文化の最高標準でありますから、斯の道に率へば榮え、率はされば滅するの必然であります。

萬物は道によつて存し、道に率はされば滅するのでありまして、宇宙間に唯一つの例外も許さぬのであります。——本文一六七頁の一節——

電話銀座一八二番  
東京東替一三七五八番

政經書房

東京市麴町區  
幸町幸ル